

空中回廊

第10号

A I C H I
P R E F E C T U R A L
M U S E U M
O F A R T

愛知県美術館友の会 会報

会員からの提言
美術雑感(夢と現実)

美術館のページ
愛知県美術館館長
長谷川三郎

1
2
3
4

私のこの一点
展覧会から
セザンヌ展
関根正二展

編集スタッフから

AICHI ARTS CENTER



会員からの提言

美術雑感（夢と現実）

平野孝雄

私はこんな夢を持っています。世界の實力ある芸術家達が日本に行きたいと願い、その中の大変優れた人たちが日本で日本人芸術家と共に活躍し、帰国後日本で活躍したことを誇りにする。芸術活動の世界の中心が日本にあることを日本人も世界の人々も実感する。日本が世界に貢献し、日本人も恩恵に浴する。この『空中回廊』は愛知県美術館友の会の会報ですから、美術を対象にしてもう少し具体的に云わせていただければ、上記環境で絵画などの一級美術作品が日本人の手によってどしどし創造され、国際的な競争のなかで鍛え上げられ自由な国際市場で高く評価され、外国人にも高値で買いとられる。シャガールやミロやポロックの作品がパリやニューヨークの一流美術館に展示されている如く、日本人の作品が数多く買い上げられ欧米美術館の、いや世界のあちこちの美術館のメイン壁面に多数展示される。そして日本人による絵画が世界の頂点に立つ。日本人としてこんな誇らしいことを夢見ています。

「こんなことはとてもとても無理。出来っこない。」と、あなたは思われますか？ やれば出来ます。日本人はそれに類することを既にやってきた実績を持っています。例えば工業製品です。日本の工業製品は、1970年代から1980年代にかけて「世界一」の折り紙がついた製品が続出しました。カメラ・時計・ミシン・テレビ・ステレオ・ビデオ・オートバイ・自動車・機械・鉄鋼材など国際競争力No.1の製品が目白押しで、日本のそれらの製品が世界中で歓迎され、日本のイメージ改善に役立ったことはよく知られた事実です。少し前、1940年代には誰も思いも及ばなかった世界の頂点に立つ實力を持つに至った誇らしい現実がそこにあります。

話が私事に及んで恐縮ですが、私は自動車関連企業に

あって、欧米に遅れをとっていた1950年代から海外雄飛の1980・90年代にかけての成長を身をもって体験させてもらって来ました。先進国企業に学び創意工夫を常とし、理念を共有化した労使が世界的な視野で合理的な努力を積み重ね、例えば排気ガス対策・小型軽量化・エレクトロニクス化では欧米と先陣争いとなり一歩リードして、お客様満足度の高い商品を世界に供給して来ました。おそらく上記に列記したどの業種でも似た努力を行って国際競争力をつけて来たものと思います。

「美術はモノ造りと違う。」あなたはそう思われるかもしれない。しかし、上記成果とそれに至るプロセスは日本を世界一の美術（芸術）の国に振興するのに多くの示唆を与えてくれることは否定されないでしょう。

* * * * *

「美術は魂のたべもの」「美術は心の栄養素」と云われ、まづ第一に美術は精神的なもの、作者の精神的活動の所産であり鑑賞者にとっても精神的な営み・喜び・癒しの対象であります。このことはここで声を大にして云わなければなりません。どのくらい多くの人々が感動し、勇気づけられ、なぐさめられ、心を豊かにすることができたか美術が果たした役割は大変大きいと思います。

モノ造りと精神的活動との違い、工業製品と美術（芸術）との違い —— 違いを力説することは可能です。どうか落ち着いて考えてみてください。共通点も多いのです。要は「芸術文化の振興」を①やる価値があるかどうか、②どういうメリット・デメリットがあるか、③どう認識し、やる気があるかどうか —— この検証が大切です。

①「芸術文化の振興」をやる価値があるかどうか。今の日本はモノが満ちあふれ、その一方で精神的な豊かさ、美しさ、気高さというものが乏しくアンバランスです。（人間の幸せは物質とお金の豊富さのみで測れるものではありません。）それらのバランスを保ち、豊かさを両面から実感できることに芸術文化が貢献すると思います。パソコンやインターネットが更に普及すれば、青少年はバーチャル（仮想）世界へと引き込まれ精神的安定を失って新興宗教への関心を強めるかもしれません。美術（芸術文化）は彼らの受け皿ともなり得ると思います。

好きな道で自己実現を計る —— そういうことがもっと許されるなら、若者は目を輝かし自分の道を自信を持って邁進することでしょう。今まで絵を描く才能を持ち画家になろうと心に決めた若者の何割が、食べていけないとの親の

説得で普通のサラリーマンになったことか。

これから数十年かけて美術関係の需要と供給をふやすべきだと思います。20世紀前半のアメリカでの例もあるのですが、社会全体として美術関係の仕事を増やし食べていけるようにする。それは、街を美しくし生活の質を美的かつ文化的に向上する、新しい価値とライフスタイルを作り上げていく、やる価値のあることだと思います。

名古屋ボストン美術館の小倉忠夫館長がこういうことを新聞のコラム欄に書いておられました。「ある銀行の頭取がヨーロッパに行って、名刺を使い果たし、やむなく銀行経営の美術館の館長の名刺を渡したら、急に待遇が変わったそうです。会食のさいの席順もぐっと上がり、ご本人はあつけにとられた由です。別の企業のオーナー兼美術館長も同様の経験をしたと聞いています。」「経済生活のみで、文化生活を欠いた一家や個人では尊敬されるはずがありません。」——このことは政治家や経済界の方々にぜひ記憶にとどめていただきたく思います。

② どういうメリット・デメリットがあるか。メリットは上段でふれました。今後の日本を考える時、「産業と貿易」で食べていく——このことは今後も変わらぬ基盤だと思いますが、上記したような理由で「芸術文化の振興」をいくつかの柱の一つにぜひ加えてほしいと思います。経済力がついて後、芸術文化が一段と輝き経済も芸術文化も長きにわたって栄えた例は数多くあります。歴史上、14・15世紀のフィレンツェや、18・19世紀のフランス、20世紀のアメリカなど。

日本は過去10年間に約130兆円(貿易収支ベース)の黒字を計上し、サービスの赤字を差し引いた後で約70兆円の黒字となり、その額は国の(年間の)一般会計予算にほぼ近い額になります。貿易相手国からはお金の還流を期待され、低金利政策もあって日本人のお金は相手国の国債や各種債券・株式・不動産などに姿を変え、売りたい時には売れなかったり、為替変動による損害を出したり、高値買いの安値売りになったり、汗水流して稼いだ外貨はかなり目減りし、そして痛んでいると思われま。貿易黒字分のせめて5%でもいい、何らかの形で日本の芸術文化の振興に役立ち貿易相手国の赤字削減にも役立つ方策を考えてほしいと思います。

デメリットは、「人・モノ・金・情報」をつぎ込み過ぎると他を圧迫し、経済成長の足を引っばる恐れが出てくることかと思。例えば、国家予算の中に占める芸術文化の予算(文化庁の予算)が、今0.1%程度の規模を0.5~1.0%程度の規模まで引き上げる程なら、デメリットよりメリットの

ほうが(トータルで)多いと思います。

③重要なことは、国の方向を決定する人々の認識の仕方とやる気だと思います。

フランスは20世紀中頃迄の約2世紀余にわたって世界に冠たる美術王国として君臨してきた実力を持ち、国内に大量の美術品の蓄積を持っていたにもかかわらず、ミッテラン大統領時代手厚い保護を与えて芸術の振興を計って参りました。例を挙げれば、フランスの国家予算の中に占める芸術文化関連予算比率が日本の約10倍もあったほどです。芸術文化軽視の日本は、いつ迄文化立ち後れ政策国でいるつもりだろうか。いつ迄、尊敬されない国でいたいのだろうか。

又、優れた美術品の美術館への寄贈や相続時の物納がスムーズに行なわれて、作品が「公開美術館」へ集まっていき、所蔵品の質と量とが欧米並みに近づいて、美術館が自分達の都市の誇りになる様、税制をどしどし変えてほしいと思います。

* * * * *

現実は今、芸術文化の振興どころか反対の極、大変きびしい状況にあります。例えば、愛知県でも芸術文化センターなどの芸術文化関係施設の予算が大幅に削減されつつあります。逆に増額し、芸術文化振興へと方向転換すべきです。愛知県美術館や芸術専門図書館であるアートライブラリーを含む愛知芸術文化センター、日本有数の陶磁器専門の博物館である愛知県陶磁資料館、県立としては先駆的な愛知県立芸術大学などは県民の芸術文化活動の中心であります。私達がどうしても守り育てていかなければならないと思っています。

あなたはどう思われますか? 本文の冒頭に書かせていただいた夢をあなたの夢と重ねていただけますか? その夢が30年後に花開き50年後に満開を迎えると想像した場合、今私たちはどうすべきでしょうか?

日本は(愛知県も)、「産業と芸術文化の国(県)」目指して芸術文化の振興を重点中長期課題として取り上げ、すぐれた作品がどしどし生み出されるようにしっかりした振興計画をたて、体制をつくり、法令に反映し予算化して、着実な実行に向けて歩を進めるべき大切な時期に来ていると思います。

あなたのご意見をぜひ美術館友の会事務局宛お寄せいただきたいと思います。



私のこの一点

愛知県美術館の
所蔵品から

藤井達吉《継色紙風屏風》

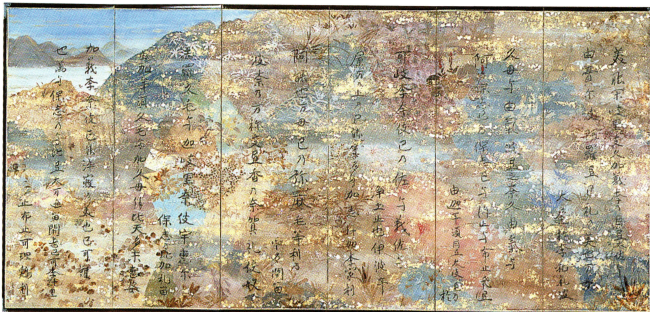
千村可津子

愛知県美術館には、碧南市出身の美術工芸家藤井達吉が、生前愛知県文化会館へ寄贈した自作ならびに所蔵美術品1,460点が所蔵されている。その中から一点を選ぶとすれば、1964年8月、83歳にて没する4ヶ月前に完成した六曲一双の《継色紙風屏風》を挙げたい。

一双の屏風の全画面は、平安時代の料紙に想を得ながら、彼独自の創意と技法による継色紙をもって埋め尽くされ、卓越した工芸家としての美意識が満ち溢れている。高雅な賦彩による色紙、染め紙、雲母摺り紙を切継、破継、重継をなして貼り合せ、その上に切箔、野毛を惜しみなく撒き散らし、高山植物を描き加え、さらに自詠の浄土礼讃歌十二首を枯淡な筆法による万葉仮名にて書き上げた労作の逸品である。

山田光春氏は『藤井達吉の生涯』の中に於いて「そこには、達吉の持っていたあらゆる技術が駆使され、具象と抽象とを渾然とさせた画面に書を媒体とした詩的表現を融合して、総合芸術を目指した達吉芸術の到達した最後の姿が現されていた」と絶賛している。

この屏風の前にたたずんだ時、達吉が渴仰してやまなかった美の世界と求道の世界があやなし具現されているのを観る思いがした。



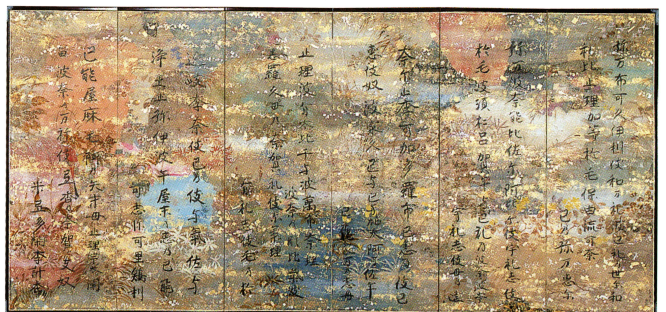
展覧会から

セザンヌ展を見て

水野あゆみ

3歳半になる娘を連れて、セザンヌを観てきた。セザンヌといえば後期の作品の印象が強かったので、今回観た初期の作品には軽い驚きを覚えた。驚きといえば、子供でも作品によって好みがあるようで初期の重苦しい作品は嫌いなようだ。「次のお部屋に行こう」としきりに私の手を引っ張る。部屋の照明が暗いのも関係していたかもしれない。一方、水浴の女性や静物画のリンゴやオレンジには興味があるようで一生懸命数えている。絵の好みというより彼女の日常で目にするものへの興味なのかもしれない。素描のセザンヌ夫人の前で「この人、女の人かな、男の人かな」と聞いてみると、「女の人」と答えてくれたけどほんとにわかったのかな。

展示室はかなり込んでいたけど子供連れは見あたらぬ。そのなかで「りんごが1、2……」、 「どくろつてなにー」の音が響くと正直冷や冷やする。今回は平日のすいてるときに来ることにしよう。娘との美術鑑賞はまだ始まったばかり。彼女なりの楽しみ方につきあっていきたい。



藤井達吉(1881-1964)《継色紙風屏風》1964年 紙・着色・コラージュ 各169.5×181.5cm

関根正二展を見て

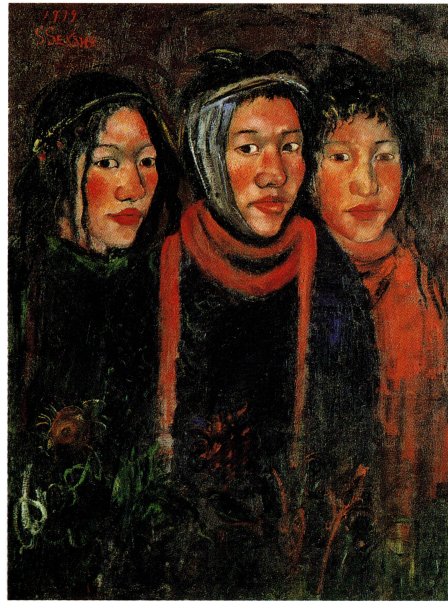
加藤正衛

11月13日(晴)。美術館に行く。普段は会期ぎりぎりに行くことが多いのだが、今回は《子供》(ブリヂストン美術館蔵)の展示が11月14日までとあったので是非もう一度会いたくて出かけた。

前回この絵に対面したのは就職して2年目に転勤になった東京でのこと。独身でもあり休日には好きな絵を見て回っている折、東京日本橋のブリヂストン美術館でこの絵に出会った。私はそれまで関根正二という画家を知らなかった。しかし、この絵を見た後には赤い色の子供が強烈な印象として残り、この作品以外の絵を思い出すことができないほどだった。今回30年ぶりの再会となったが、あのときと変わらぬ子供がいた。印象的な赤を身につけた彼はいつまでも私の中に生き続けるだろう。



関根正二(1899-1919)《子供》1919年 油彩・カンヴァス 60.6×45.5cm ブリヂストン美術館蔵



関根正二
《三星》1919年
油彩・カンヴァス
60.5×45.5cm
東京国立近代美術館蔵

関根正二《三星》

牧野麗子

関根正二という画家を私はまったく知りませんでした。ただ《信仰の悲しみ》だけは見覚えがありました。それは一昨年大原美術館に行った時に見かけたのだと思いますが、作者の名も見ないまま通り過ぎてしまったようです。出会いというものがなければ、ずっと知らずに終わってしまう画家や、すどおりしてしまう作品は多いものです。今回、鑑賞会のおかげで関根正二の人生や彼の生きた時代を知り、作品の一つ一つに向き合うことができました。

関根は二十歳にも満たない歳で「世は悲哀から造られた様にも思はれる」という心境に達しています。なんと早熟なことかと驚いてしまいますが、彼のわずか二十年の生涯は悲哀という人生の一側面にふれるに十分な内容だったのかもしれませんが。そして、彼の感性は悲哀なところに聖地を見出したのでした。

《三星》には、三人の人物が描かれています。三人の頬は赤くつややかで、若さがみなぎっているようです。左の女性の唇の赤のなんときれいなことでしょうか。緑色との美しい対比が、画面のアクセントにもなっています。中央の青年は関根自身だそうですが、彼の表情には青年期特有の誇りや恥じらい、自負のようなものが感じられて、思わずほほえんでしまいます。彼はこの絵の中に自分の理想の居場所を求めたのでしょうか。

晩年は静かな祈りのような作品が多いのですが、何と言っても青春の真っ只中であつた関根です。生身の若者らしさがにじみ出たこの作品が私の好きな一点です。



鞍ヶ池アートサロン

中野ともみ

今回は豊田市の鞍ヶ池アートサロンにうかがいました。暖冬とはいえコートでも肌寒くなった12月の下旬、鞍ヶ池から眺める足助の山々はすっかり冬支度。空はきれいな青色で、薄い雲がゆっくり流れていました。

鞍ヶ池アートサロンはトヨタ鞍ヶ池記念館の中にあります。この記念館は1974年、トヨタ車の生産台数累計1000万台を記念して鞍ヶ池のほとりに作られました。中にはトヨタAA型乗用車(1936年型)も展示されています。記念館は芝に覆われた小高い丘の上にあり、周囲の風景を壊さぬようその屋根にも芝が張られています。そのため池沿いの道路からはなにも見えません。記念館の入口から急な坂道を50メートルくらい登っていくとようやく左手にその姿を現します。記念館のあたりから眺める景色や、建物自体の直線、曲線の組み合わせにも絵画的な趣があり、こちらを見るだけでも来たかいがあるように思います。

アートサロンが開設されたのは昨年で、今回の展覧会が6回目だそうです。ここで展示される作品は主としてロビー、会議室などの掲額を目的に選ばれているため、印象派を含め風景、静物など落ち着いたものが多いようです。今回の展示のテーマは「花と果実の香り 美しき日本の四季展 ～秋から冬へ～」ということで、会場には日本の作家の作品から花や果実にちなむものが20点ほど展示されていました。私たちが迎えてくれた作品は落ち着いた緑のバックに煉瓦色の菊を描いた佐伯祐三の《菊》(1926年)、微妙な色彩の変化をしっかりと描いた中谷泰の《秋草》(1989年)、薔薇を生けたギリシア風の壺が印象的な進藤蕃の《白薔薇》(1996年)などです。ほかにも、梅原龍三郎の《薔薇》(1975年)は華やかに咲き誇る色とりどりの薔薇が今にも絵からこぼれ落ちそうです。

アートサロンでは年に4回の企画展を行います。今回のようなテーマ展のほかに家族向けの催しもあります。昨年の夏休みには「親子で楽しむ絵画展—光と水のかたらい」と題した企画展があり、一万人を越える入場者で賑わったそうです。この展示ではモネの《睡蓮》も展示されていましたが、どなたかご覧になった方はいらっしゃいますか。

このアートサロンは絵画を収集・保管することが目的の施設ではないので展示できる作品の点数にも限りがありますが、企画展のために東京の会議室から作品を運んでくることもあるそうで担当する方も大変です。でも、ここにすれば毎回楽しい作品と出会うことができそうです。

今回は、「人物画展」(3月18日～6月18日まで)の予定です。モディリアーニ、ルノワール、岸田劉生、北川民次などが展示されるそうです。さて、どんな作品に出会えるのでしょうか。その頃には、きっと桜も咲いているはず。春休みの1日、暖かい日を選んで鞍ヶ池公園までピクニックに出かけてみませんか。



開館時間: 午前9時30分から午後4時30分

休館日: 月曜日(祝日の場合は翌日)、春期・夏期・年末年始の会社連休日ほか
入館料: 無料

交通: 豊田市駅からバス、鞍ヶ池公園前下車徒歩3分

愛知県美術館長
長谷川 三郎

美術館は、どのような尺度によって社会から評価されるのでしょうか。また美術を愛する人々は美術館に何を期待なさっているのでしょうか。そして美術館活動の理念はいかにあるべきでしょうか。

イコム(ICOM)という名で知られる国際博物館会議では、博物館一般を次のように定義しています。「博物館とは、社会とその発展に貢献するため、研究・教育および楽しみの目的で、人間とその環境に関する物的資料を収集、保存、研究し、これを伝達、展示する、人々のために開かれた非営利の恒久的機関である」と。ここで言う博物館は、総合的なものから、美術、考古、歴史、民族・民俗学はもとより、科学、軍事、産業などの専門博物館、さらには動物園、植物園、水族館などの多様な施設を指しています。この定義を美術館の立場から考えてみますと、「楽しみ」の目的という表現に特別の意味が感じられます。美術館はその名の示す通り、芸術の重要な一領域を占める「美術」を活動の対象としています。美術館以外の博物館施設を訪れた場合でも、私たちは芸術的な感動やそれに近い体験に恵まれることはありますが、美術館の最も重要な特質は、芸術的体験そのものを第一の目的としているところにあり、それが美術館を他の諸博物館と截然と分つ独特の存在意義となっていると言えます。(またここで、東京国立博物館などのように、名称は博物館であっても明らかに美術館に分類されるべき博物館施設も多いことに注意しておくことも大切です。)従って、上の「博物館」の定義を美術館に限定してみますと、「……芸術的体験および研究・教育の目的で、美術作品を収集、保存、研究し」と読替えることができるでしょう。そして、「人々のために開かれた非営利の恒久的機関」という定義は、美術館の活動と運営に携わる者にとって、またその設置者にとって、常に忘れてはならない重要な倫理的指標となっています。

このように考えてみますと、美術館の評価は何よりもまず、展示することができる所蔵作品の「芸術的な」水準の高さによってなされることとなります。けれども日本の多くの美術館が置かれている環境を顧みますと、仮にかなり質の高い所蔵作品を持つ美術館であったとしても、特色のあるコレクションで知られる少数の国立や私立の美術館を例外として、残念ながらそれが正当に評価されているとは思われません。具体的に言えば、一見華々しい展覧会だけがもてはやされ、所蔵作品展示だけでは来館者を呼ぶことができないという評価以前の現実が浮び上って来るのです。それは、「美術館」という呼称が濫用され、一時的な展覧会場と「恒久的」な常設の美術館とが区別されないままにきた歴史的経緯に一因があります。そして、「恒久的機関」としての自らの活動や運営のありかたを不断に検討刷新する努力を怠ってきた美術館に、その責任の大半が帰することも認めなければなりません。国立博物館・美術館などの独立行政法人化は、それが「行政の効率化」と言う観点から生れた安易な発想である点において大いに問題がありますが、自ら招いた結果と批判されても仕方がないのかも知れません。これは国立美術館学芸員の末席を汚していた筆者自身の反省と自戒をこめての言葉とお受取り下さい。

さて、数こそ多いとはいえ、このように未成熟な日本の美術館界においても、またそうであるが故に、最近では美術館の活動と運営に関わるさまざまな問題が議論されるようになりました。三百を超える会員館を擁する全国美術館会議でも、博物館法を検討する専門委員会が設けられたり、教育、情報、保存など、さまざまな課題を研究するいくつかのワーキング・グループの活動が活発に行われたりしています。また文化庁も登録美術品制度を実現したり、学芸員研修の新たなプログラムを発足させたりしています。

理想的な美術館像を説明する時、その組織と建物はし

編集スタッフ から

ばしば氷山に喩えられます。海上に見える部分を「人々に開かれた」施設や活動とすれば、それに数倍する海面下に隠れた部分が、それらを支えるための非公開施設や調査研究組織として無くてはならないという意味です。美術館活動を維持するための外からは窺い知れない作業は、非常に多岐に渡っています。けれども、それらはいつか必ず、美術館を利用する人々への有形無形の提供物やサービスとなって現れるもの、そうならなくてはならないものであり、また世代を超えて後世に継承されるべき精神文化の証を蓄積し保存する作業でもあるのです。

このような美術館活動を全うしようとする時、なによりも大切なのは、いかに多くの人々に愛され、その活動の意義を理解してもらうことができるか、そして精神的にも物質的にもどれほどの支援を確保することができるかということです。いまや美術館では活動に注ぐ労力の多くが、そのために費やされようとしています。愛知県美術館は、まだ生れて間もない幼児期にある美術館です。なるほど日本の公立美術館の中では、ずいぶん大きく生れた赤ん坊であったかも知れません。そうであるなら、なおさら十分な栄養と内容豊かな教養を与えて育ててゆかなければならないのではないのでしょうか。何よりも美術を愛する人々によって構成されている〈友の会〉は、美術館の最も良き理解者にして支援者の集りです。会員の方々は、この美術館を見守り、私たちの活動に加わり、美術館の成長に手を貸して下さって来ています。〈友の会〉組織の発展は、美術館を育て、その活動を支える大きな力となるでしょう。〈愛知県美術館友の会〉そのものが、当然のことですがまだ若い組織です。さらに多くの美術を愛する人々が参集され、美術館とともに〈友の会〉も大きく成長することを願ってやみません。

・今回、3月発行とのことで、友の会に入ったきっかけを紹介させていただきます。その年、母の友達の退職祝いを考えていました。外出の楽しみを贈りたいと思い、私も入会し、彼女にもプレゼントしました。書が好きな方でした。今では絵にも興味をお持ちのようです。一緒に美術館を訪れることもあります。近年、友達は最高の財産と分かるようになりました。疎遠にならないよう心がけています。

今年の初め、金箔に墨で描かれた松の絵を見ました。発見がありました。黒地に金を描くと華やかに感じられるのに対し、金色に黒を描くと渋くなるのです!どうしてなのでしょう。

十代の頃、先生から「新鮮な感動を得るために本を読みましょう」と勧められました。絵を見る事も「新鮮な感動」があつていいと思います。大人になると「驚く気持ち」が失われると聞きます。本当なのでしょう。 [伊藤]

・2000年を迎え愛知県美術館は「セザンヌ展」を開催中です。20世紀絵画に大きな影響を与えた彼の作品は、今世紀最後の年に開催するにふさわしい見応えのある展覧会として心に残るに違いありません。前号の「会員からの提言」で取り上げられていた「戸張孤雁展」は、むしろセザンヌとは対照的に、一般にはあまり知られていないタイプの作家ですが、残念なことに鑑賞者の足はやはり作家の知名度に影響されることが大きいのが現状かと思われまます。個々の作品芸術性をみずから評価するのは非常に難しいことから、すでに名声を得ている作家の作品を楽しむといった感じでしょうか。これも悪くはないと思いますが。

芸術作品は結局は人間の感情が反映されたものですから、最初から一所懸命理解しようとして「解らない」「難しい」と深く考えなくても、まずは何か感じられるものがあれば、それで良いのではないのでしょうか。この『空中回廊』にも毎号「私のこの一点」が掲載されていますが、皆さんも、気に入った作品が見つかったら更に深く踏み込みつつ自分でそれを再評価して、「私の一点」を増やしていったらいかがでしょう。 [村山]

編集

会 員：宮崎玲子/平野孝雄/杉山博之/中村桂子/中野ともみ/森健次
伊藤淳子/村山るみ

協 力：愛知県美術館企画普及課

発 行：2000年2月
愛知県美術館友の会
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2
TEL 052-971-5511(代)
FAX 052-971-5604